

草戸千軒町遺跡出土の木簡―形態を中心に―

志田原 重人

一、はじめに

昭和三十六年に平城宮跡で発見されて以来とくに古代史研究の間で注目を浴びた木簡も、今日では古代の都城や地方官衙・城柵だけでなく、中世の集落・館・城郭・寺院さらには近世都市・城郭からも木簡の出土が相ついで報じられ、その数は三万点を越えるにいたったといわれている。

ところで木簡の出土に伴い、用途や機能などに関する研究がなされ、また遺跡の性格や年代さらには共伴遺物の年代決定にも木簡が用いられてきたことは周知のとおりである。しかしその反面、木簡の概念規定について①木片に墨書したものの総称とか、②文字を書く目的を以て作られ、原則として文字の書かれたものとか、③墨書はなくても木簡の関係品と思われるものをすべて取扱うべきであるとか、④木簡の概念はその機能の面から考えるべきであるとして柿経・呪符・棟札・卒塔婆などは木簡の範疇に入らないとするなどの諸

説に分かれているのが現状である。またその形態についても、たとえば小論で扱う草戸千軒町遺跡を例にとると奈良国立文化財研究所で現在行っている十五型式の分類にはあてはまらないものがあり、報告等にはそれぞれまちまちに表記されている場合が少なくない。

以下ではこれらを念頭におき、中世遺跡の中でも量的に最も多く出土している草戸千軒町遺跡の木簡について形態を中心に述べることにする。

一、草戸千軒町遺跡と木簡出土の遺構

草戸千軒町遺跡は広島県福山市を流れる芦田川の河底に眠る中世集落跡で、大規模な調査によって中世庶民生活の様相が具体的にになり始めている。

まず遺跡包蔵中州の北部では石敷道路や囲柵、掘立柱建物、溝、井戸、土壇などを検出し、石敷道路に面した約一町四方の土地を柵で細分し、その南では小ささまざまな溝が縦横に走っていることが

明らかになった。一方、中州の南部では幅十～十六メートルの環濠とそれに囲まれた内陸部で掘立柱建物や土壇が検出できた。

出土遺物は膨大で、土器、土製品、石製品、金属製品、木製品、骨角製品、動植物遺体などありとあらゆる遺物がある。中でも遺跡が永年水漬け状態にあるため木製品の保存は良好で、箸、杓子、漆器などの飲食器をはじめ、下駄、草履状木製品のような履物、鍬先や鋤先などの農具、それに流通資料たる木簡、さらには卒塔婆や呪符、人形などの信仰・呪術資料等貴重なものが数多くある。

草戸千軒町遺跡については江戸時代に記された地誌以外文献史料が皆無に等しいため、遺跡の性格については発掘成果から復原せざるを得ないのが実情である。しかしこれまで推定されてきた常福寺の門前町ないし福山湾西南に位置する港町の何れかを明確に断定しうる根拠は現在のところまだ発見されていない。強いていえば木簡や瀬戸・常滑・備前陶、輸入陶磁、古銭などの出土遺物や、遺跡の後背地に立地していた長和荘との係わりからみて港町に比定できよう。

ところで、草戸千軒町遺跡調査研究所では墨書（文字）のある木製品を総称して墨書木札類と呼んでいるが、昭和四十四年に溝状遺構で発見して以来四千点が出土している。このうち大半は削屑で、九十パーセントに当たる三千六百四点が出土している。古代木簡の流れをくむ中世木簡は五・七パーセントに当たる二百二十七点である。以下用途明瞭な木製品が八十三点（二・一％）、未詳十点（〇・

三％）、断片七十六点（一・九％）である。つぎに出土遺構であるが、池・井戸・土壇・溝などから出土している。中でもSG三五〇池が二千八百四十五点と最も多く、ついでSE一五〇一井戸の七百三十九点、以下主なものではSK一三〇〇土壇の五十二点、SE一八五〇井戸の四十五点、SK五八二土壇の四十四点、SG一七九一池の四十二点、SD五五〇溝の三十七点、SD五二〇溝の三十六点などである。特徴的な遺構をつぎに記することにする。

SG三五〇——一辺が約六メートルから十一メートルの四辺形の池で、数回にわたる砂土が堆積していたが西方向からの川砂と木質の堆積が顕著である。土師質土器や漆椀、人形などと共に削屑が二千八百十四点も出土した。伴出遺物から室町時代前半に比定される。

SE一五〇一——一辺三・二メートルの不整円形の掘方の北寄りに一辺八十九～九十六センチの方形横棧型井側を据えたもので、土師質土器や古銭などと共に削屑七二八点が出土した。室町時代後半に比定される。

SK一三〇〇——径六～八メートル×深さ一～一・二メートルを測る土壇で、上部では土師質土器や古銭などさまざまな遺物が、底部では土師質土器および下駄・漆器などと共に木簡が出土した。長方形の材の一端の左右に切込みを入れたものが十七点、長方形の材の一端を尖らせたものが十点ある。室町時代前半に比定される。

SE一八五〇——径約二・一メートルの円形掘方のほぼ中央に一辺

九十五センチの方形横棧型の井側を据えたもので、削屑四十一・一点呪符二点が出土した。室町時代中期に比定される。

SK五八二―長さ十四メートル×幅三・五メートル×深さ〇・五メートルの土壙で、土師質土器や漆器など共に木簡が出土した。板材や角材に孔を穿ち削込んだものが三十一点ある。室町時代。

三、木簡の形態について

現在日本で発見される木簡の形態分類を行う時には、奈良国立文化財研究所で行っているものが一応の目安とされている。しかし、前述のように遺跡の時代が新しくなるとその基準にそぐわないものが多くあることに気付く。古代のものの中世のものも「木簡」と称する以上、後に混乱をきたさないためにも統一的な形態分類を行うことが望ましいと思われるが、ここでは草戸千軒町遺跡出土の木簡を素材として中世木簡の形態について考えることにした。

現在草戸千軒町遺跡調査研究所で墨書（文字）のある木製品を総称して墨書木札類と呼んでいることは前にも述べたが、墨書木札類をさらに五つに細分している。すなわち中世木簡（100～109）、用途明瞭な木製品に墨書のあるもの（110～119）、折損・腐蝕その他によって原形の判明しないいわゆる断片（120）、削屑（199）がそれである。

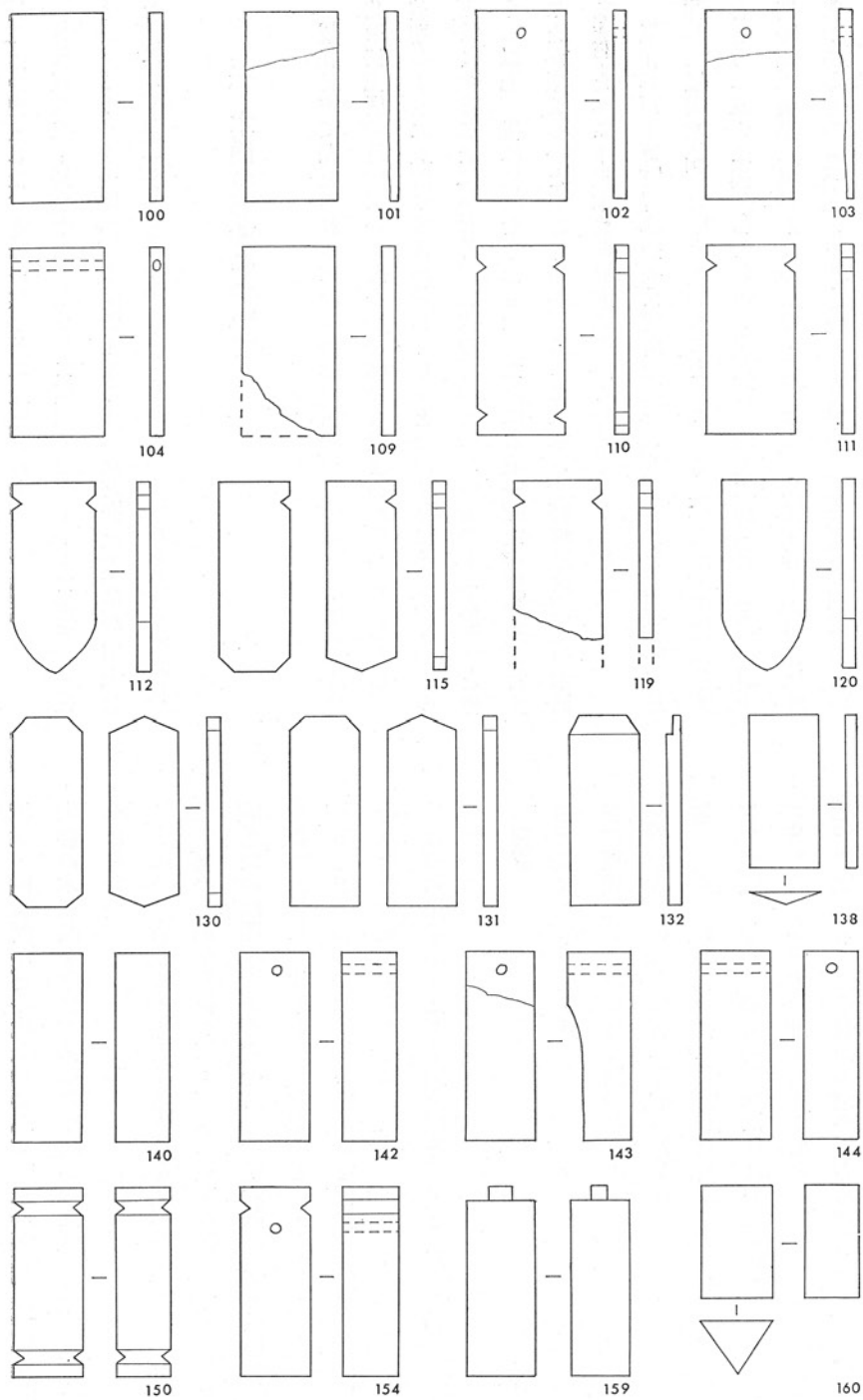
このうち用途明瞭な木製品は卒塔婆や位牌・柿経・御札・呪符・折敷・曲物板など多岐におよんでいる。なお、用途明瞭な木製品や未詳の木製品を中世木簡に含めなかったのは機能を考えたからにほかならない。

ところで古代の木簡と中世木簡を比べた際一見して気付くのは中世木簡の方がやや幅が広く、厚みがあるということである。とくに顕著なのは厚みである。そこで中世木簡の厚さと幅の比率（厚／幅）を調べた結果、比率が〇・六未満と〇・六以上一・〇未満とに分かれることがわかった。そこで前者を板材、後者を角材としてさらにそれぞれを細分することにした。

この結果をふまえて形態分類を示すと左の如く二十五型式に分類できる。

（板材）

- 100 型式 長方形の材。
- 101 型式 長方形の材を削ったもの。
- 102 型式 長方形の材に穿孔したもの。
- 103 型式 長方形の材に穿孔したもので削ったもの。
- 104 型式 長方形の材の側面に穿孔したもの。
- 109 型式 長方形と推定できるもの。
- 110 型式 長方形の材の両端の左右に切込みを入れたもの。
- 111 型式 長方形の材の一端の左右に切込みを入れたもの。



木 筒 の 形 態

- 112 型式 長方形の材の一端の左右に切込みを入れ、他端を尖らせたもの。
- 115 型式 長方形の材の一端の左右いずれかに切込みを入れ、他端を圭頭にしたもの。
- 119 型式 長方形の材の一端の左右に切込みがあるが、他端は折損あるいは腐蝕して不明のもの。
- 120 型式 長方形の材の一端を尖らせたもの。
- 130 型式 長方形の材の両端を圭頭にしたもの。
- 131 型式 長方形の材の一端を圭頭にしたもの。
- 132 型式 長方形の材の上部を段に切取り、上端を圭頭にしたもの。
- 138 型式 表面が長方形で、断面が三角形をしたもの。
- 139 型式 長方形の材を不整形に切取ったもの。
- (角材)
- 140 型式 直方体の材。
- 142 型式 直方体の材に穿孔したもの。
- 143 型式 直方体の材に穿孔したもので削ったもの。
- 144 型式 直方体の材の側面に穿孔したもの。
- 150 型式 直方体の材の両端の四面に切込みを入れたもの。
- 154 型式 直方体の材の一端の左右に切込みを入れ、かつ正面に穿孔したもの。
- 159 型式 直方体の材の一端を突き出させたもの。

160 型式 三角柱をしたもの。

以上の分類を要約すると、①長方形の材(100番台)、長方形の材に切込みを入れたもの(110番台)、③長方形の材を尖らせたもの(120番台)、④その他の板材(130番台)、⑤直方体の材(140番台)、⑥直方体の材に切込みを入れたもの、直方体の材の一端を突き出させたもの(150番台)、⑦多角柱の材(160番台)になる。

つぎに出土数を見ると板材百三十七点(約六十パーセント)、角材九〇点(約四十パーセント)で、その内訳は第一表の如くである。つまり長方形ないし直方体の材に穿孔したもの(102・103・142・143型式)が最も多く、百四十二点を占める。ついで一端の左右に切込みを入れたもの(111型式)が二十六点、一端を尖らせたもの(120型式)が十四点とつづいている。

ところで、木簡の基本形は長方形ないし直方体で、他の諸型式は

型式番号	点数	%
100型式	9点	3.97%
101	2	0.88
102	9	3.97
103	52	22.91
104	6	2.64
109	6	2.64
110	1	0.44
111	26	11.455
112	1	0.44
115	1	0.44
119	5	2.20
120	14	6.17
130	1	0.44
131	1	0.44
132	1	0.44
138	1	0.44
139	1	0.44
140	1	0.44
142	26	11.455
143	55	24.23
144	2	0.88
150	1	0.44
154	1	0.44
159	1	0.44
160	3	1.32
計	227	100.0

第1表 中世木簡形態別出土点数表

それに、①切込みを入れる、②一端を尖らせる、③孔を穿つなどの加工を施したものであるといえる。したがってこれらの出土点数が多いのは当然のことで、この点に関しては古代木簡との間に大差はないようである。

切込みを入れるものは両端の左右および両端の四面に入れるものと、一端の左右および一端の左右のいずれかに入れるものの四種類がある。そして頭部は方頭のものゝ圭頭のものゝがある。切込みは物品にくくりつけて付札とするための加工で、くくりつけた紐の痕跡が付着残存したものもある。

一端を尖らせたものは俵などに突刺したり、物品にかけた縄の間にはさみ込んだり、また紐の結び目に押しこんだり、あるいはまた商品の値段を記しその前に置いたりしたものと思われる。

孔を穿つたものは、大まかに言うゝと材に垂直ないし斜めに穿つたものと、側面から水平に穿つたものゝがあるが、量的には斜めに穿つたものが圧倒的に多い。孔は円形のものゝ方形のものゝがあり、方形のものゝより円形のものゝが多く、円形のものゝの大多数は焼火箸によるものである。孔は紐を通して結びつけたり綴ったりしたものゝと思われるが、箸状木製品を孔に刺込んだものゝも一点出土しており、使用法を考える上で当面の課題と言えよう。

木簡の大きさについて狩野久氏は『第一回木簡研究集会記録』の中で、通常幅二〇三センチ、長さ二十センチ前後であるとし、また

弥永貞三氏は『第二回木簡研究集会記録』の中で、日本の木簡は長さ、幅において大体の傾向をもってはいるが、極めて不揃いであること、また縦横比には時代的な変化があると指摘されている。これらは古代の木簡についてであるから中世木簡と同一視して考えることが困難であるが、草戸千軒町遺跡出土のものゝ大きさは不揃いで、ありあわせの材を用いていたものゝと思われる。強いていえば幅三〇四センチ、長さ十〇二十センチのものゝが最も多いようである。木簡の樹種については未鑑定のため速断はできないが、少なくとも一〇・一一・一二〇型式のものゝは針葉樹が多いように思われる。木取りについては、板目取の方が多く見られた。

なお、文字がないため断定できないが、竹の一端に切込みを入れたものが一点出土しており、類例を待つて今後検討しなければならぬ。


四、木簡の記載内容について

判読できないものゝが多いため記載内容の全貌を明らかにすることはできないが、これまでに判読できたものゝうち主なものを次に紹介する。

(D-11 区溝状遺構)

X-131

草戸千軒町遺跡出土の木簡

・「四月かり也 西阿□ 二月六斗 □まし 」		119×32×24 142	・「半分かり入 三めおろし□□ 」	103×20×18 142
X—一三五			・「この内一め七十七うる」	
「(葦カ) □田川	□□□也		(S五三〇池)	
米五□内 (俵カ)	」	97×50×11 102	X—〇七五	
X—一三七	・「 □□ 」		・「てち□ 九十□ (てカ) 卅た□ 四十た□ 卅た□ たて□ つ□ (つカ) □□□ 」	
・「□□衛門五郎殿 あつけ」		153×28×19 143		
X—一四〇			X—〇六九	
・「□三斗二升四合 百四十六石□きほし」			・壹貫 壹貫 」	
・「□□□□□」		108×32×13 104	・壹貫 壹貫 」	
X—一四一				

・壹貫
」

(55)×27×20 150

(SD五二〇溝)

X—〇七八

・「くしか□□五□くさいろ
いまくらとのまいる」

・「古いよりしやうせい」

150×25×04 112

(SD五五〇溝)

X—〇八七

・「おり下候
十三□□九卅」

・「百七十八かし
三斗六升五合」

119×25×16 143

(SK五八二土壙)

X—〇八九

・「くろめの
二百わし」

・「ひやくてう□□」

131×23×22 143

(SD七六〇溝)

X—一四三

・「大麦三斗
二百
信□□せう」

109×28×11 103

(SK一三〇〇土壙)

X—二九〇三

・「ミあかしのれうニあふら
一かうを二百十文ニかう
きのしやうのあふら」

・「う十一月十八日より
はしめてあかす」

235×35×06 111

(SG一七九一池)

X—三六八九

・「拾貫
伍貫文
のうち」

・「まつ
したの(花押)」

55×25×05 111

これらのほとんどが売買・取引あるいは物資の調達・移動などに
際しての書き手自身の覚え、ないしは付札・荷札として用いられた

もののようである。しかしその反面、古代の木簡に見られたような文書風のものとは皆無に等しいようである。ただX―〇七五のように材を横に用いたものやX―一四一のような内容のものもあり、これが今日見られるような帳簿の原型になりうるのかどうか今後考えてみなければならない問題である。

なお、片言隻句のため明らかではないが、折敷に習書ないし落書をしたと思われるものがある。

木簡の記載内容と形態とが不可分な関係にある以上、形態のちがうものや、たとえ形態が同じであっても大きさによって記載内容に何らかの差異があるようにも思われるが、草戸千軒町遺跡出土のものに関するかぎり形態と記載内容の関係を明らかにすることはできなかった。この点については内容を詳細に検討して後日明らかにしたい。

五、信仰・呪術資料について

草戸千軒町遺跡では用途明瞭な木製品のうち卒塔婆や呪符などのいわゆる信仰・呪術資料に墨書のあるものが比較的多い。次に主なものを紹介する。

(卒塔婆)

X―一一五

「
南無阿弥陀佛」

X―一一六

「
南無カ
藏菩薩カ
文地
」

共にSE〇一六井戸出土。X―一一六には上端から五センチ、下端から一センチのところに小孔があり、何かに結びつけていたものと思われる。

X―一一七

「
念
明王
」


念
明王

SD四五〇溝出土。初七日の不動明王を祈念して故人の菩提をとむらったものである。

X―一二二

SD七六〇溝（環濠）出土。故人の追善供養のために明応二（一四九三）年に造られた順修塔婆である。

「     一見

「 字五逆消滅真言得果即身成佛右意」
者^(趣カ)午^(為カ)歲^(浦カ)永^(マ)主忌依頓證佛果也
明應二年潤卯月九日 敬白

乃至法界平等利益 施主

(位牌)

X—一二三

・「

「 歸真

道圓禪門 丙辰六月六日

靈位

妙通禪尼 甲子六月三日

SD七六〇出土。命日の丙辰は明應五(一四九六)年、甲子は永

正元(一五〇四)年か。

(御札)

X—一二三

・「

永

奉轉讀大般若經

除^(廿八カ)


二月^(廿八カ)

SD七六〇出土。右下の永の下は欠損しているが、左下の目付か

ら右下の永は年号を示すものと思われ、明應二年銘の塔婆が共伴していることから「永正」を示すものと思われる。

(呪符)

X—〇八三

・「 阿天形星

SE三八〇井戸出土。疫病除けの神符。

X—一二四

・「

(噫々如律令カ)

そも口き

SD七六〇出土。

X—二八七五

・「天中(三宝荒神の絵) 无

SE一〇一五井戸掘方出土。旧暦八月一日の秘符で、火災・盗

難・疾病・口舌の災いを払ったもの。

X―三六五六

・「咄天足麗」

SK一八二五土壙出土。治病・消災・延生・度厄の神符。

六、おわりに

現在、紀年銘のあるものは卒塔婆が一点だけで、遺跡の年代を考える上にも紀年銘のある木簡の出土が待たれている。

また、遺跡の性格を考える上で決め手となる木簡はまだ出土していないが、「う山」(宇山)・「さかへ」(坂部)・「きのしやう」(木之匠)といった周辺村落の地名や、米・大麦・精麦・牛・紙・くろめ(黒海布)・刀・弓・油など当時草戸千軒において取引きされたと思われる産物の名が見え、中世における地方市場の様相を考える上で、また文献史料の上からはとかく不明の中世の物価を考える際にも極めて有効な資料となるものと確信する。

草戸千軒町遺跡における木簡の研究も緒についたばかりで、今後ほかの中世遺跡出土のものと比較検討し、研究を進展させたい。